

かがやき

Hiroshima City Hospital public relations magazine

Kagayaki

被爆80周年を迎えて ～これからも広島医療のために～



広島市立広島市民病院
病院長

松川 啓 義

私は本年4月に広島市立広島市民病院・病院長を拝命致しました。広島医療・福祉を支える基幹施設の1つである当院の管理者となり、その重責に身の引き締まる思いがあります。その職責を1つずつ丁寧に果たしていきたいと決意しています。

本年、広島は被爆80周年の節目を迎えました。私は8月6日に「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式典」に病院長として参列する機会をいただきました。当日は広島の皆さまと想いを共にし、原爆で犠牲になられた多くの方々の霊を慰め、世界の恒久平和を願い祈りを捧げました。式典に列席した私の眼前には、慰霊碑・平和の灯・原爆ドーム、そして平和記念公園周囲に広がる市中心部の賑やかな街並みが広がっており、広島市の街の復興を成し遂げた方々への敬意と感謝の気持ちが溢れてきました。

医療の視点から80年前に思いを巡らせると、被爆により広島医療も崩壊寸前に至りました。防空救護業務を義務づけられていた広島市内の医療従事者2370名の9割を超える方が被爆され、439名の方が原爆で殉職されたとの記録を目にしました。これ以上ない悲惨な状況から現在の広島医療を築いてこられた先輩方の無数の有形無形のご尽力に、改めて心から感謝致します。広島市民病院は、終戦の7年後、復興の道を歩み始めた昭和27（1952）年8月に診療科目4診療科・病床数89床で開設しました。以降70年余りに渡って様々な機関と連携・協働し、同時に皆様から暖かいご支援を賜り続け、広島医療を支える基幹病院へと成長し37診療科・病床数743床の現在の姿があります。

日本全体に目を向けると、現在我々は「超高齢化社会」を迎えています。今年は団塊の世代が全員75歳以上の後期高

齢者になりました。少子高齢化は今後さらに加速し、生産年齢人口の減少が2040年にピークを迎えると予測されています。このような背景の中で、救急医療や高度な専門医療を受けられる患者さんは、様々な持病・多様な社会的背景を有する御高齢の方が年々増加しています。そのような社会の変化の中で最適な医療を提供し続けるためには、当院の様な高度急性期の病院ですべてを行う医療のみでは、真に患者さん一人一人のための医療を提供することが難しくなっています。お住いの地域のいろいろな機能に分化した医療・介護・福祉施設や在宅支援を行う機関が役割を分担し、有機的に連携し協働して一人一人の患者さんを治療しご家族を含めて地域全体で支えていく「治し支える医療」が今後ますます必要とされています。

高齢化社会に伴う医療・介護需要の増大が、社会の中で、ともすれば世代間の分断を生みかねない論調で語られることもあります。広島で被爆された方の平均年齢は今年86歳を超えたそうです。医療を最も必要とする現在の高齢世代の方々は、筆舌に尽くしがたい程悲惨な戦中戦後の喪失・貧困・混乱の時代の中で、今を生きる私達のために復興の礎を築いて下さった世代の方々でもあります。被爆80年を迎え、先輩世代の方々への敬意と感謝の想いを改めて胸に刻み、医療・福祉分野で貢献し続ける広島市民病院でありたい、と心から思います。一人一人の患者さん・御家族に「広島で良かった」「ここで良かった」と実感していただけるような病院であり続けるべく、努力を積み重ねて参ります。

今後とも広島市立広島市民病院へのご理解・ご協力を何卒よろしくお願い致します。

病院の動線：より快適な医療環境を目指して



特任病院長
出家正隆

広島市民病院に赴任して4年目になります。院内で迷うことは少なくなりましたが、急いでいるときに動線の悪さを痛感することがあります。病院は、患者さんが適切な医療を受けるための場であるべきです。そのためにも病院内の動線はできるだけスムーズである必要があります。患者さんは、病院に医療を受けに来ます。治療がうまく行われても、医師の態度が悪ければ、不満につながります。さらに病院に来て受付や検査に行くのに疲れるようであれば、残念でなりません。また以前入院した診療科と異なる診療科に新たに入院したら、勝手が違って戸惑うことがあると、患者さんは本当に安心して治療を受けられるでしょうか。物理的な構造や、院内の運用ルールがその流れを妨げていることもあります。

病院の動線の課題を列举してみますと

1. 物理的な動線の問題

- 院内での移動が分かりにくく、迷いやすい
- 受付から診察・検査・入院までの流れが診療科で異なる
- 緊急時の入院ルートが最適化されていない

2. 精神的な動線の問題

- 患者さん同士の情報共有が少なく、不安感が生じる
- スタッフ間の連携が不十分な場合、治療の流れがスムーズに進まない
- 診療科ごとの独自ルール（入退院日の決め方が異なるなど）が、患者さんの混乱を招く

これらを改善するためには、

建て替えには時間がかかるかもしれませんが、人の動線の改善は今すぐにでもできることです。

- ・ 患者さんへの優しい声かけ
- ・ 診療科間で共通ルールを策定し、統一化する
- ・ スタッフ同士の連携を深め、スムーズな治療を提供する

この病院が、患者さんにとって「信頼できる場所」であり続けるために、物理的・精神的な動線の改革が不可欠です。すべての患者さんが『広島市民病院で治療を受けてよかった』と思える環境を目指して、今後も改善を進めていきたいと思えます。

就 任 の ご 挨拶



副 院 長 (事) 看 護 部 長
樽 本 久 美 子

この度、2025年4月1日付で副院長（事）看護部長を拝命いたしました樽本久美子と申します。私は、学生時代の実習期間も含めると33年間、広島市民病院とともに歩んでまいりました。内科・耳鼻咽喉科・脳神経内科・精神科など様々な診療科を経験し、2015年より看護師長、2022年より副看護部長として看護管理業務に携わらせていただきました。

私が看護職についてから30年の間に、医療を取り巻く環境は大きく変化しました。社会全体のデジタル技術は目覚しく進化し、医療現場ではロボット支援手術やゲノム医療など各分野での飛躍的な進歩が続いています。一方で、昨今の物価や人件費等の高騰により病院経営は深刻な状況となっており、地域の皆さまに安心していただける持続可能な医療体制を維持するための改革も不可欠となっています。

看護部の理念は「やさしさと思いやりを大切に、安心・安全な看護の提供」です。安心・安全な看護を提供するためには、一人ひとりのスキルを磨くことはもちろんのこと、患者さん・ご家族の気持ちに寄り添える「思いやり」がなければ、看護専門職としての本来の役割を果たすことはできないと考えています。このことは、どんなに時代が変わろうとも、変えてはならないことです。当院では、人材育成に力を入れており、学生から管理職に至るまで、それぞれの段階に応じた教育支援を行っています。人材育成をしていく中で、私は「恩送り」の考えを大切にしています。自分が先輩方から受け取った恩を、次の世代にバトンのように受け渡し繋いでいくことで、人が育ち続け、強くしなやかに成長できる組織になると信じています。

今後、少子高齢化により、さらに働き手が減少し、医療従事者の確保も困難になることが予測されています。そこで看護部では、昨年末より夜間学生アルバイトの採用をはじめました。現在35名の学生さんが看護補助者として働いています。これにより、看護職の負担軽減になり、看護師でなければ出来ない業務に専念できるため、安心・安全な療養環境の提供へとつながりました。また、患者さんからは、「学生さんと話ができて、元気をもらった」といった声をいただき、学生も医療職としてのやりがいを感じています。今後も未来の担い手に、看護の魅力を伝えながら、医療現場に円滑に適応できるよう育成に尽力してまいります。

広島の中核病院として市民・県民の健康と命を守り、地域の皆様に信頼される質の高い医療・看護を提供できるよう看護管理者として邁進してまいりますので、今後とも広島市民病院をよろしくお願いいたします。

中央手術室について



手術室 主任部長
中 野 敢 友

手術は、患者さまにとって不安と緊張を伴う大きな出来事です。だからこそ私たちは、技術の精度だけでなく、安心と信頼を大切にしています。「周術期外来」（まだ一部の患者さまに限られていますが、順次拡大中です）にて、外来時から手術に関して説明をしたり、手術後には「術後疼痛管理チーム」（麻酔科医師、手術室看護師、薬剤師で構成）が病棟を訪問してサポートしたりするなど、安心して手術を受けて頂ける体制づくりを進めています。

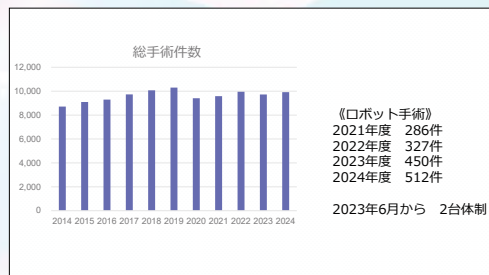
中央手術室は、スタッフみんなが安心して意見を交わせる場所であり、互いを支え合いながら成長できるチームでありたいと考えています。これからも、安全で温かな医療を届けてまいります。

中央手術室は、患者さまの命と未来を守る最前線であり、日々多くの手術が行われています（資料1）。最先端の医療機器とともに、外科系医師、麻酔科医、看護師、臨床工学技士など、高度な技術を持つ医療スタッフが揃っていますが、それだけでは十分ではありません。手術の安全を支える真の力は、スタッフ同士の深い「信頼関係」と、誰もが安心して意見を交わせる「心理的安全性」にあります。

信頼関係とは、単に仲が良いということではありません。互いの専門性を尊重し、責任を共有し、困難な状況でも冷静に行動できる関係性です。器械を手渡すタイミング、患者さまの状態のわずかな変化など、小さな疑問や違和感を感じたときに、「これで大丈夫？」、「少し変化があります」と、ためらいなく声を掛け合うことができる環境—それが安全な医療につながります。このような心理的安全性を保つため、手術室では、各部屋にアンケート用紙を常備し、スタッフの意見を積極的に収集しています（資料2）。また、毎年春には、手術室新人看護師向けの勉強会を開催し、心理的安全性やアンガーマネジメントについて学びます。そして冬に再度勉強会を行い、1年を振り返るとともに、「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」を受ける時の、「おひたし（怒らない・否定しない・助けてあげる・指示する）」の大切さなどを学び、指導者としての心構えを育みます（資料3）。



看護師67名（パート含む）、受付4名、看護補助12名の大所帯です。平均年齢32.2歳で、若いスタッフが多い職場です。



（資料1）

当院での年間手術件数
毎年およそ10,000件の手術を行っています。
新型コロナウイルス感染拡大に伴う手術制限の影響で、手術件数は減少しましたが、その後回復しつつあります。手術室が全部で17室あり、現在は16室を使っています。全17室が稼働できるよう工事が始まっており、手術室運用のさらなる効率化が期待できます。

（資料2）

手術室の各部屋にアンケート用紙を常備しています。

（資料3）

2025年春の勉強会のときの写真です。「心理的安全性」、「アンガーマネジメント」、「ほうれんそう」の「おひたし」文化の熟成には、このような勉強会の継続が大切だと考えています。